

令和 8 (2026) 年度  
追手門学院大手前高等学校  
入学試験問題

国語

- ・ 解答するときには文章記号も一字として答えなさい。
- ・ 各設問につき、記号は一回しか使用してはいけません。

注意

コンピューターで答案を読み取るため、はっきりと濃く解答を記入してください。  
濃さが十分でない場合は解答が読み取れず不正解になる場合があります。

受験番号



問題は次のページから始まります。

□ 次 の 文 章 を 読 ん で、 後 の 問 い に 答 え な さ い。

眞家早馬は陸上部の長距離選手であるが、高校二年の秋に膝を骨折し、高校三年生になってもまだ陸上選手として復帰できていない。早馬はクラス担任の稔から声を掛けられ、料理研究部の井坂都から放課後に料理を習うようになった。

黙って両手を動かす早馬に、都は溜め息と共に聞いてきた。

「進路のこととか、稔になんて言ったんだよ。まあ、面談のあとに稔の畑でこき使われてるあたり、答えはなんとなく予想つくんだけど」

「本当、遠慮なくさずかと言ってくれるものだ。」

「前に少し話しただろ？ 管理栄養士になろうと思つてさ。日農大に受かるにはかなり頑張らないといけないみたいで、稔に心配されたよ」

「稔の心配つて、絶対そこじゃないと思うけど」

けれど、彼女の遠慮のなさは、図太さは、無神経さは、どうしてだか心地がいい。 □ A を、懇切丁寧に目の前に並べてくれるようだった。

「井坂は、小さい頃からやってるスポーツとか、ないのか」

「ないね」

「走るの好き？」

「嫌いだよ。足が遅いんだ、私は」

「俺は小学校の頃から持久走とかマラソン大会が好きで、中学に入ったら迷わず陸上部に入った」  
刻んだカブの葉は下茹でする必要があるらしい。煮物の仕上げに、下茹でしたカブの葉を加えて軽く煮る、と書いてあった。

「箱根駅伝とか、もの凄く憧れててさ、大手町も横浜も小田原も箱根も行ったことないけど、あそこをいつか走るんだらうなって、馬鹿なことを考えてたんだよ」

小振りな鍋に水を入れてコンロの火にかけた。ほのかなガスの香りと共に、青色の炎が揺らぐ。  
「その頃からずっとそうだったんだ。学年が上がったり、中学から高校に上がったり、そうやって段階を踏みながら、力のない奴や向

いてない奴はふるい落とされていくんだよ。みんな、走らなくなっていくんだ」

「自分もそうだって言いたいのか？」

「そうだな。そう思う」

カブの葉を下茹でしている間に、カブを食べやすい大きさに切っていく。こん、こん、こんという調子のいい音が自分と都しかいな調理実習室に響く。

① あんた、それでいいんだ」

「じゃなきゃ、もっと真面目にリハビリしてるだろ」

「その代わり、あんたはここで料理をしようと。気まぐれに稔の畑を手伝って、その食材で料理をして、弟に栄養のバランスの取れたご飯を食べさせてあげている」

「ああ」

「そしてついに部活もこの夏で引退することにして、秋の駅伝の大会も見届けず、管理栄養士になるために受験勉強をする」

「その通り」

「それって、② 空っぽになった場所を、料理をすることで埋めた気になっただけなんじゃないの」

都は鍋にだし汁やみりん、醤油、酒、アサトウを入れた。熱された手羽元の油と混ざり合い、耳を揺らすような芳しい音がする。こんな話をしていなかったら、唾液が込み上げてくるだろうに。

「勝手にやめた兄貴に『お前のために』って顔で食事の世話されてる弟が、可哀想だな」

井坂は、俺を怒らせようとしている。取り乱して、彼女を怒鳴りつけて、腹の底に沈んでいる本音を吐き出させようというのだろうか。「そうかもしれないけど、どんな世界だって、上に行く奴っていうのはそういうものを無理矢理、背負わされるんじゃないかな」

毎年正月に箱根を走るランナー達も、甲子園に出場する高校球児達も、名人戦に挑む棋士も、文学賞を受賞する作家も。その後ろにはそうなりたくてなれなかった人が山のようにいて、その人達の期待とか願いと嫉妬とか羨望とか、そういったものが彼らの肩にはのしかかっているのだ。

俺の分も頑張ってくれとか、あんたは俺達の希望の星なんだから、とか。そんな無責任だけれど強いウソソクリヨクを持った言葉にエシバられて、きつと年を経るごとにそれは増えていって、それでも走っていくのだ。

眞家春馬はそういう人間になる。

※ 助川亮介も、そうなる。

これからたくさんの人を蹴落として、たくさんの人の夢を打ち破って、終わらせる。諦めた連中は「俺の分まで走ってくれ」なんて言いながら、春馬と助川の中に自分の夢を見続けるのだ。

それこそ、※ 駅伝で繋ぐ襷たすきのように。③ いろんな人の汗が染みついた襷は、強い者へ、走り続ける者へと、どんどんどんどん受け継がれていく。

いろんな人の夢を背負って、彼らはずっと走っていく。

「あんた、本当にそれでいいんだ？」

ああ、いいんだ。そう言ったはずなのに、喉が仕事をせず音にならなかった。涙が込み上げてくるのがわかる。涙が目頭に溜まっていくのが、わかる。

④ 正直さ、怖いんだ、走るの

「また怪我をするかもって？」

「それもあるし、何より、誰かに追いかけてられるのが怖い。後ろにいた奴が迫ってくるのも、追い抜かれるのも、怖い」

何より、自分を追い抜いた背中が、どんどんどんどん、どんどん小さくなって、いずれ見えなくなることが、怖い。

「なあ井坂、お前は、きょうだいはいるか？」

「いないよ。そもそも、私ができちゃったことも両親にとっては想定外だったみたいだし」

そうか、そうなのか。

「弟って、不思議な生き物なんだ。弟がレースに勝つと嬉しいし、タイムが上がると自分のことみたいに喜べる」  
でも。

「でも、弟に負けるのは、もの凄く怖いんだ。他の人に負けるのとは違う。もっと冷たくて痛いんだ」  
春馬のことを嫌いになれたらいいのにと、何度思っただろう。その方がずっと楽だったはずなのに。

たとえば、箱根駅伝を自分が走っている姿を想像しようとする。憧れの、幼い頃はいつか絶対走るのだと信じていた場所を。けれども、どの間にかそこにいた自分は、眞家早馬でなくなっている。よく似た、特に目元がそっくりだと多くの人に言われる、眞家春馬の顔になっている。

もう自分は、お終しまいなのだ。

「怪我をしたとき、悲しかった。悔しかった。でも、安心もしたんだ」

「やめる口実ができたから？」

「もう、俺は弟に負けないで済むんだ」

⑤ ぼたりと、まな板の上に雫が落ちた、出所は、自分の両目だった。ああ、さっきは、稔との二者面談のときは、ちゃんと我慢していたのに。

「おい、カブに落とすなよ。しょっぱくなる」

手の甲で目元を拭って、胸に詰まっていたものを<sup>オ</sup>吐息と一緒に吐き出した。

「いい隠し味になるよ、きつと」

そう言って、まな板ごと都のところを持っていく。都は何も言わず、一口大に切られたカブを鍋にごろごろと入れていった。

(額賀滯『タスキメシ』より)

※助川亮介：有力な陸上選手で、真家早馬のライバル。

駅伝：複数のランナーがリレー形式で長距離を走り、バトンの代わりに襷を順に渡し、そのタイムを競う陸上競技。

問一 — 線部アゝオの漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 — A に当てはまる語句として最も適切なものを次のアゝエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の嫌いな料理      イ 自分に欠けていること      ウ 見ないようにしてきたもの      エ 入試に足りない学力

問三 — 線部①「あんだ、それでいいんだ」と述べた都の心情を四十五字以内で説明しなさい。

問四 — 線部②「空っぽになった場所」の説明として最も適切なものを次のアゝエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 陸上競技が嫌になったので逃げ込むことができる他の場所。  
イ 弟の料理を作るために自分には不足している技術を補う場所。  
ウ 管理栄養士になるために必要な調理経験を積み重ねる場所。  
エ 陸上競技をやめることで失われた自分のより所となる場所。

問五 — 線部③「いろんな人の汗が染みついた襪」が例えているのはどのようなものか。三十五字程度で説明しなさい。

問六 — 線部④「正直さ、怖いんだ、走るの」とあるが、早馬がこのように述べているのはなぜか。理由として最も適切なものを次のアゝエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 怪我をすることは怖いと思わないが、自分が弟に追いかけて負けることに痛いほどの恐怖を感じてしまうから。  
イ 自分が誰かに追い抜かれることが怪我に繋がってしまうのではないかと考え、走ることで自体に恐怖を感じているから。  
ウ 弟に負けることよりも他の誰かに追いかけて抜かれることが怖く、選手を続けることを断念しているから。  
エ 誰かに追い上げられて抜かれることが怖く、特に弟に負けることに怖さを感じて、選手復帰を尻込みしているから。

問七 — 線部⑤「ぼたりと、まな板の上に雫が落ちた、出所は、自分の両目だった」とあるが、この部分の説明として最も適切なものを次のアゝエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が陸上競技で弟に負けてしまったことが悔しく、怪我をして安心したと感じた自分自身を内心情けないと感じている。  
イ 自分が今まで触れようとしなかった自分の内面の葛藤を相手の前にさらけ出したことで、感情が抑えられなくなっている。  
ウ 井坂に陸上選手として復帰しないことを繰り返して責められて、これ以上何も反論できないでいる自分を惨めに感じている。  
エ 井坂との会話によって、自分が陸上選手として復帰する実力がいないことに初めて気付く、動揺を抑えられないでいる。

問題は次ページにつづく。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その昔、われわれの先祖である①ヤマト民族は、漢字文化を吸収することで「②日本人」になった。そもそも「日本」「日本人」という呼称自体が、和語（やまとことば）ではなく、漢語である。義理人情など日本人の価値観、日本人の世界観といったものも、漢字や漢文から多大な影響を受けている。

一例をあげると、色彩を表す言葉もそうである。中国人は、古来、色彩感覚に敏感な民族であった。例えば、同じミドリ色でも、

緑 植物系の暖かいミドリ

碧 宝石のような無機質で冷たいミドリ

翠 カワセミの羽のように光かがやく高貴なミドリ

など、まったく違う語で言い分けた。

I これと対照的に、古代ヤマト民族は、色彩を表す言葉を II あまりもたなかった。

和語の赤は「明し<sup>あか</sup>」、青は「淡し<sup>あわ</sup>」、白は「著し<sup>しろ</sup>」、黒は「暗し<sup>くろ</sup>」、という明暗濃淡を示す語の転用である。現代日本語でも、明るい太陽を「真つ赤な太陽」、淡く輝く月を「青い月」などと言うのは、古代の名残である。現代日本人の目に、太陽の色がレッドに見えたり、月がブルーに見えているわけではない III。

和語のミドリは、もともとは色彩ではなく触感を表す語で、和語ミヅ（水）の派生語である。例えばミドリゴ（嬰兒）は、みずみずしい肌 IV ふくよかな赤ちゃん、という触感的表現である。「緑色の赤ちゃん」という意味ではない（ちなみに「ミドリの黒髪」は、濃緑色のつやがある黒髪を意味する漢語「緑髪」の訓読語で、こちらは色彩語である）。

ヤマト民族は六世紀ごろから、本格的に漢字を学び始め、③漢字で自分たちの言葉を書き記すようになった。和語ミドリには、「緑」という漢字をあてた。たしかに「緑」は、みずみずしい草や木の葉の色を表すのにふさわしい漢字である。しかし、緑にはグリーンという色彩の意味もあった。V その結果、いわゆる「軒を貸して母屋を取られる」現象が起きた。触感語だった和語ミドリは、漢語の緑の意味に引きずられ、純粋な色彩語に転じてしまったのである。和語ミドリの本来の意味は、「みどりご」という熟語のなか

で、④「生きた化石」のように保存されることになった。

古代の和語の世界は、まるで白黒映画であった。古代ヤマト民族が、色覚異常だったわけではない。ただ、文明化される前のヤマト民族の社会生活では、鮮やかな色彩を言い分ける必要がなかった。そのため、色彩を専門に表す語が乏しかった。

ヤマト民族は、漢字や漢詩文を学ぶことで、みずからの頭の中身を改造して「日本人」になると、一転して色彩の美に熱中するようになったが、これは七世紀以降のことである。

古代ヤマト民族は、色彩語だけでなく、⑤時空把握用語も、あまりもたなかった。

A、時刻が早いのと、スピードが速いのは、まったく違う概念である。英語でも「早」はearly、「速」はquick、と別の語を使う。しかし和語では「早い」と「速い」を区別せず、ともに「ハヤシ」の一語で済ませていた。

現代の日本語でも、口頭で「はやい」と言うと、「速い」と「早い」を混同する場面がある。御菓子の「お早めにお食べください」という注意書きを勘違いした子供が、ガツガツと「速めに」菓子を食べた、という笑い話がある。大人でも、

「明日は、いちばんハヤイ列車に乗るから、そのつもりでいてくれ」

と言われると、明日は新幹線の「のぞみ」に乗るのか、B、在来線の始発列車に乗るのか、一瞬考えてしまう（発言者が「青春18きっぷ」の愛用者なら、後者の意味であろう）。

また、

「うちのお父さんは、起きるのがものすごくハヤイ」

と言う場合、お父さんの職業が消防士なら「速い」かもしれない。

右のように、たまに混同する例もあるが、現代日本人が「早い」と「速い」を区別できるのも、頭のなかで漢字を思い浮かべているからである。

日本の漢字漢文の歴史を知れば、われわれの祖先である古代ヤマト民族の世界観も見えてくる。漢文は、日本人自身を見つめなおす鏡にもなる。

（加藤徹『漢文の素養』より）

問一 波線部を文節に分けた場合の文節数と、単語に分けた場合の単語数をそれぞれ数字で答えなさい。

問二 二重傍線部 I、V の単語の品詞名として適切なものをそれぞれ次の A、B、C の中から選び、記号で答えなさい。

A 名詞・代名詞      I 動詞      U 形容詞      E 形容動詞      O 副詞  
カ 連体詞      キ 接続詞      ク 感動詞      ケ 助動詞      コ 助詞

問三 

A	B
---	---

 に当てはまる語として適切なものをそれぞれ次の A、B、C の中から選び、記号で答えなさい。

A なぜなら      I そのため      U しかし      E たとえば      O それとも

問四 線部①「ヤマト民族」②「日本人」について、次の A、B、C の短文のうち、「ヤマト民族」の特徴に当てはまるものには「A」、  
「日本人」の特徴に当てはまるものは「B」、どちらにもあてはまらないものには「C」の記号をそれぞれ答えなさい。

A 社会生活の中で鮮やかな色彩を言い分ける必要がなかった。

I もともと色彩感覚に敏感で色彩を現す語句が豊富であった。

U 漢字文化の影響で色彩の美しさに注目するようになった。

E 明暗濃淡を表現する語句を転用して色彩を表現しようとした。

問五 線部③「漢字で自分たちの言葉を書き記すようになった」とあるが、「ミドリ」を「緑」と書き記すようになったことで、その意味は具体的にどのように変化したのか。三十文字以内で説明しなさい。

問六 線部④『生きた化石』の意味として最も適切なものを次の A、B、C、D、E の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 古くて今では使い物にならないということ。

I 言葉の使い方は古くから変わらないということ。

U 言葉が適切な意味で使われているということ。

E 言葉本来の古い意味を留めているということ。

問七 線部⑤「時空把握用語も、あまりもたなかった」とあるが、古代の和語のその特徴を現代の日本語はどのように補っているのか。「はい」という語句について四十五字以内で説明しなさい。

問八 本文の内容と一致するものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人の先祖であるヤマト民族は漢字文化を吸収して、世界観までも変化させることによって大きく発展を遂げた。
- イ 現代日本語で明るい太陽を「真っ赤な太陽」と言うことは、「赤」という語句が古来色彩を表す語句だったからだ。
- ウ 日本人は中国から伝わった漢字漢文の影響を受けたので、日本語本来の使い方をされる語句が減少してしまった。
- エ 日本における漢字や漢文の受容の歴史を理解することで、古代日本人の見方や考え方を明らかにすることができる。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近ごろ、奥州にある山寺の別当なりける僧、※本尊を造立せんと、年ごろ思ひ企て、金五十両、守り袋に入れ、頸くびに懸かけて、※上洛しけるほどに、駿河の国、原中の宿にて、昼、水浴みける所に、この袋を忘れて、次の日の夕方、思ひ出したりけり。①口惜しく、

※あさましかりけれども力及ばず。②今は人の物にぞ成りぬらむ。帰りて尋ねともあらし」と思ひ、上洛してむなしく下向せむも本意なく覚えて、形のごとく本尊を造り奉りて下りける。

さて、原中の宿にて、下人に、「この家とこそ覚ゆれ」など云ひて、見入れて通りけるを、家の中より、若き女人ありて、「何事を仰せらるるぞ」と言ふ。「上りの時、物を忘れたりしが、この御宿と覚え候ふ事を申すなり」と云ふ。「何を御忘れ候ひけるぞ」と問ふ。その時、あやしくて、馬より下り、「しかじかの願ぐわんを起こして、金を五十両入れて候ふ守り袋を忘れたり」と、ありのままに委くはしく語れば、「童こそ見付けて候へ」とて、したためしままで取り出で、取らせければ、③あまりの事にて、あさましくこそ覚えけれ。

さて、「これは失せたる物にてこそ候へ。十両は女房まろに参らせむ」と云えば、「十両欲しくば、五十両ながらこそ引きこめ候はめ。仏の御物なり。いかが少しも給はるべきか」と云ひければ、なかなかとかくの子細に及ばず。

「下りの時、よくよく申すべき旨あり」とて、やがて上洛して、本尊、思ふごとく造立して、下りざまに、この女人を尋ねて、「そもそも、いかなる人にておはするぞ。何様なる事をして過ぎさせ給ふぞ」などと、こまやかに語らひ聞きければ、「京の者にて侍るが、親しき者もみな失せて、縁につれて下りて侍るが、あからさまに思ひしほどに、この宿に一兩年住み侍り」と云ふ。「さては、いづくも同じ御旅にこそ。いざさせ給へ。小所領ちまきやうなど知行する身なれば、④世間後見て給べ」と云へば、「承りぬ」とて、やがて具せられて下りて、世間後見て、楽しく心やすく、当時までありと聞くゆ。

(『沙石集』より)

※本尊：仏像のこと。

※上洛：京に行くこと。

当時は京に向かうことを「上る(のぼる)」と言ひ、京から地方に向かうことを「下る(くだる)」と言つた。

※あさましかりけれども：驚きあきれたが

問一 次の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えなさい。

- (a) とふ (b) ぐわん (c) まゐらせむ (d) いづくも (e) ちぎやう

問二 — 線部①「口惜しく、あさましかりけれども力及ばず」とあるが、この時の僧の様子として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 金を失ったことをひどく残念に思う一方で、世の中の無情さを悟り、あきらめの境地に至っている。  
イ 紛失に気づかなかった自分の不注意を恥じ、どうすればよかったのかと後悔の念に駆られている。  
ウ 懸命に貯めた金を失い、本尊を造ることができなくなったことに絶望し、途方に暮れている。  
エ 悔しい気持ちでいっぱいだが、今さらどうすることもできないと思い、あきらめて上洛しようと思っている。

問三 — 線部②「今は人の物にぞ成りぬらむ」とあるが、文中に「ぞ」がある場合、文末は終止形からどの活用形に変わるか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 未然形 イ 連用形 ウ 連体形 エ 已然形

問四 — 線部③「あまりの事にて、あさましくこそ覚えけれ」とあるが、このとき僧がこのように思ったのはなぜか。三十字程度で説明しなさい。

問五 — 線部④「世間後見て給べ」とあるが、僧が女人を自分の治める土地に連れて帰ろうとしたのはなぜか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 女が自分と同じく京の者であり、共に旅を続けければ、孤独な旅路を慰められると考えたから。  
イ 他者の金に私欲を持たない誠実さに感銘を受け、さらに女の境遇を聞いて気の毒に思ったから。  
ウ 自身の本尊造立が無事に叶ったのは、女が金を保管してくれたおかげだと考えたから。  
エ 京の都に戻りたいと願う女の気持ちを察し、その願いを叶えてあげたかったから。

問六 女が金五十両を受け取らなかった理由が書かれた部分を、本文中から二十字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問七 『沙石集』は説話に分類されるが、同じく説話に分類される作品を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 竹取物語 イ 宇治拾遺物語 ウ 源氏物語 エ 平家物語

問題は以上です。

